

## 蝦夷地とロシア

—北辺医史学の背景としての日露関係—

秋月 俊 幸

私は主として日露関係史を研究している者ですが、その関連で江戸時代に蝦夷地と呼ばれていた北海道やカラフト、千島で多くの医師たちが活動していたことに関心をもっています。これらの医師たちが当時は人煙稀な辺境の蝦夷地にやつて来たのは、日露関係に起因するものでしたし、また直接蝦夷地には来なくても何らかの意味で日露関係に大きな役割を果たした医師たちも少なくなかったからです。よく知られているように、北海道への種痘の伝来や箱館病院の開設などもロシアと関係がありました。医史学とは無縁の私が専門家の皆様の前でこのような話をするのは僭越ですが、ここでは蝦夷地における医史学の背景となった日露関係について簡単に述べてみたいと思います。

今でこそ海を隔てた隣国であるロシアのことを日本人が初めて意識し、この国についていくらかの知識をもつようになったのは十八世紀末のことで、その先駆者となったのは二人の医師吉雄耕牛と工藤平助でした。そのきっかけは、いわゆる「はんべんごろうの警告」とよばれるもので、一七七一年にカムチャツカで反乱を起こしたハンガリア生まれの政治流刑囚フォン・ベニョフスキーが、仲間とともに官船を奪ってマカオへ逃亡の途中長崎のオランダ商館長宛てに書簡を送って、ロシアの蝦夷諸島への野心を警告したのです。幕府はそれを無視したのですが、長崎ではオランダ人や蘭通詞たちによって同地を訪れた識者たちにそのことが喧伝されたようです。のちに『三国通覧図説』を書いて蝦夷地を

ロシアに先んじて獲得することを力説した仙台藩士林子平は、ベニヨフスキーの警告を直接オランダ商館長のフェイトから聞いたとのべています。また蘭通詞でオランダ流外科の第一人者であった吉雄耕牛は、九州豊後の特異な思想家であった三浦梅園にロシアの蝦夷地蚕食の危険を熱心に説いたそうです（『扁山録』）。

その後吉雄はオランダ人から『ゼオガラヒー』および『ベシケレイヒング・ハン・リュスランド』という二冊の蘭書を入手して、その中からロシアの地理、歴史の情報を抄訳し、一七八一年にフェイトに随行して江戸へ参府した折にそれを仙台藩医の工藤平助に見せたようです。一方、工藤はすでに松前藩の関係者たちから、一七七九年にロシア人たちが蝦夷地のアツケシに来て松前藩使節と会見した情報を入力していたので、松前と長崎からの情報をつき合わせて『赤蝦夷風説考』という本を書き、それを勘定奉行松本伊豆守を通じて時の老中田沼意次に提出しました。この本の下巻には主として工藤が吉雄から手に入れたロシア情報が記されていますが、それはわが国における最初のロシア関係書ともよぶべき記念的なものでした。ただ、工藤は吉雄とは違ってロシアには侵略の意図はなく、オランダ人がそのことを吹聴するのは、日本との貿易を独占したい下心があるためだと的をえた批評をのべています。

工藤が記した蝦夷地におけるロシア人の密貿易の事実を調査するために、天明五―六年（一七八五―八六）には幕府最初の蝦夷地探検隊が派遣されましたが、それはロシア人の蝦夷地到来の実態のほかに、蝦夷地の地理・産物・アイヌ民族の状況について初めて正確な情報をもたらしました。それまでは松前藩の秘密主義のゆえにロシア人の蝦夷地到来はもとより、蝦夷地そのものが厚いベールに覆われていたのです。探検隊の報告にもとづいて幕府の勘定奉行は直ちに蝦夷地の開拓を計画しましたが、そのことは田沼の失脚のゆえに実現しませんでした。田沼の後を継いで老中首座となった松平定信は、蝦夷地の開発がロシアを招き寄せると考えていたからです。

しかし寛政四年（一七九二）にはロシア最初の遣日使節ラクスマンが伊勢の漂流民大黒屋光太夫らを伴って根室に到来し、海防問題に腐心していた松平定信を驚かせました。このとき松前藩は根室に藩士鈴木熊蔵と藩医加藤肩吾を派遣し

ましたが、彼らはロシア人と友好的に交際したようです。とくに医師の加藤は日本語通訳ツゴールコフや商人バビコフからロシア語を学んだり、ロシア事情を聴取して『魯西亜実記』という本を書いております。彼らはまた地図も交換しましたが、加藤が与えた「松前地図」はのちにロシアで刊行された北太平洋地図のなかで利用されています。まもなくこの地に到来した幕吏たちもロシア語を学んだようで、田辺安蔵は『魯西亜語類』という和露語彙集を、また医師の源有（今井元安？）も『魯西亜弁語』および『魯西亜文字集』を編集しています。

以上のように日露関係史のなかでは、そもそも初めから医師たちの活動が目立つのですが、それは彼らが当時における代表的な知識人であったばかりでなく、鎖国時代にもかかわらず海外への開かれた目をもっていただからだと思えます。そのことは大黒屋光太夫からのロシア事情の聴取を命じられて驚くほど詳細な『北槎聞略』を編集したのが、將軍の侍医で蘭学者の桂川甫周であったことから分ります。同様に仙台藩医で蘭学者の大槻玄沢も、ロシアから帰国した仙台領石巻の漂流民たちの話をまとめて『環海異聞』という有名な本を残しました。また『解体新書』の共訳者の一人であった前野良沢もロシアに関心をもち、蘭書から『東察加志』や『魯西亜本紀略』などを翻訳しています。

幕府が寛政十一年（一七九九）以後蝦夷地を松前藩から上地して直接経営に乗り出したのは、ロシア人の千島南下に対抗して蝦夷地を確保するためでした。この時期には幕府の御雇医師ばかりでなく、蝦夷地の警備を命じられた東北諸藩からも多数の藩医たちが蝦夷地の各地に派遣されておりました。寒冷で馴れない土地における幕吏や諸藩兵たちの健康を維持するためには、医師の常駐が不可欠だったからです。幕府の蝦夷地政策のなかではアイヌ民族を懐柔するために彼らへの救恤がとくに重視されましたので、これらの医師たちはアイヌの治療にもあたっていたようです。そのことはエトロフ島駐在の御雇医師久保田見達の『北地日記』が、アイヌ長老への往診を依頼された記事から書き始めていることから分ります。この日記は文化四年（二八〇七）の二隻のロシア船によるエトロフ島襲撃のことを書いたものですが、若い頃兵学が得意であった見達は間宮林蔵とともに積極的な迎撃を主張したようです。しかしロシア人に敗北したのち

は幕吏の菊地惣内に頼まれて南部・津軽両藩の敗残兵を率いて北海道に逃れ、その後はただ一人で箱館に急行して事件の第一報を伝えていきます。面白いことにこの事件を最初に江戸へ注進したのも、同じく御雇医師の新築閑叟でした。彼らはそれぞれ『北地日記』と『北槎筆記』を書いており、この事件についての第一級の史料となっています。この両者を合わせたものが『二叟譚奇』です。

露米会社雇いの海軍士官フヴォストーフに日本北辺の襲撃を命じたのは、文化元年（一八〇四）に交易関係の樹立を求めて長崎に来航したロシアの遣日使節レザーノフでした。彼は長崎で幕府から受けた無礼を罰し、日本に交易を強制することを意図したのです。しかし皇帝アレクサンドル一世からの許可が届かなかったため、あいまいな指令変更を残して首都へ帰る途中クラスノヤルスクで死亡しています。一方フヴォストーフは指令変更の意味をはかりかねて当初の計画を実行し、カラフトのアニワ湾やエトロフ島、利尻島の日本の施設を焼払い、あるいは日本船を襲撃したのです。折しもアメリカ船エクリプス号が津軽海峡を通過したために、数百隻のロシア船が蝦夷地を包囲したという噂が広まり、日本中が大騒ぎになりました。そのため幕府は東北諸藩に増兵を命じ、まもなく北海道、カラフト、南千島には三千人ほどの東北の諸藩士が展開しています。その結果、蝦夷地で越冬した諸藩士のなかから、当時は「水腫病」あるいは「浮腫病」と呼ばれた懐血病のために多くの死者がでました。とくに文化四―五年にオホーツク沿岸の斜里で越冬した津軽藩士の場合は百二人のうち七十二人が死亡し、それは寒冷地特有の風土病と考えられていたようです。宗谷詰めの津軽藩士山崎半蔵は、「この病気には生大根が著しい効果があり、あたかも高麗人參のように尊んだ」と書いています。その後の蝦夷地関係文献の中にはこの病気のことを「チンガ」と記したものがありますが、それはロシア語で「懐血病」のことですから、恐らくはこの病気がロシアから帰国した漂流民たちによっても伝えられたものでしょう。漂流民たちばかりでなく、有名なベーリング探検隊の一行の多くもこの「チンガ」が原因で死亡しています。

ロシア船のエトロフ島襲撃事件に関連して、北海道の医史学のなかでもっとも有名なのは、中川五郎治や安芸の久蔵

によるロシアからの種痘の伝来だと思えます。そのことについてはすでに多数の文献があり、とくに近年では松木明知先生によって詳しい研究がなされています。エトロフ島でロシア人の捕虜となり、シベリアで五年を過した五郎治が種痘術を学んだのは、彼のシベリア滞在の末期のことで、イルクーツクから日本への送還の途中ヤクーツクとオホーツクでロシアの医師たちに付添って見よう見真似で覚えたようです。彼は自分のシベリア体験について『五郎治申上荒増』と『異境雑話』という二つの手記を残していますが、その異常な体験とシベリア諸民族の風俗・習慣についての正確な観察は驚くばかりで、吉村昭氏の『北天の星』はそれらを材料にしたすぐれたドキュメンタリー小説です。一方、ロシアから種痘苗を持帰った安芸の久蔵はカムチャツカに漂着した摂津の歓喜丸の乗組員でしたが、凍傷で足の切断手術を受けたために一行から遅れてゴロヴニン一行の釈放の際に箱館に送還されました。彼は義足をつけて帰ってきたようですが、当時の日本人がそれを見てどのように感じたか知りたいものです。

五郎治はオホーツクへの道中、恐らくはヤクーツクで一宿させてもらった商人から「オスペンナヤ・ザラーザ」（疱瘡の予防法即ち種痘に関する本をもらって持帰りました。文化十年（一八一三）に松前に派遣された長崎の蘭通詞馬場佐十郎が、この本をテキストにしてロシア人捕虜ムール少尉からロシア語を学び、やがて『遁花秘訣』という書名で翻訳を完成させたことはよく知られています。

このようにして、江戸時代の北海道はロシアを経由しての種痘伝来の濫觴の地となったのですが、それは残念ながら全国には伝わらず、幕末の安政四―五年（一八五七―五八）に箱館奉行村垣淡路守の要請で江戸から派遣された桑田立齋や深瀬洋春らによるアイヌに対する集団種痘は長崎伝来の種痘法によるものでした。とはいえ、安政二年に始まった幕府の第二次蝦夷地直轄においてもロシアに対抗する手段として、アイヌ民族の撫育が重視されておりましたので、それは対露政策の一環であったということができます。つまりそれも日露関係史の一齣の側面をもっていったのです。

安政五年に各国と締結された修好通商条約の結果、箱館にはロシア領事館も設置され、そこには海軍病院としての口

シア病院が付置されておりました。そのころの箱館はあたかもロシアの軍港のようなもので、この港には頻繁にロシアの艦船が出入りしていたのです。当初は箱館奉行の許可を受けて例外的に行なわれていた日本人に対する治療は、すぐれた海軍軍医の技術のために直ちに評判になり、日本人医師たちのなかからもこの病院で西洋医学の伝習を希望する者が出始めました。そのことに発憤したのが箱館奉行所の在住医師栗本瑞見や塩田順庵で、彼らによる日本側の箱館病院はロシア病院の刺激によつて開設されたということができそうです。

以上のべてきたように、江戸時代における日本北辺の医史学は、直接あるいは間接的に日露関係と結びついていたことが多かつたのではないかと思います。

(元北海道大学法学部助教授)